

日本語学
2011.11
臨時増刊号
(vol.30-14)

言語研究の 新たな展開

監修

宮地 裕
甲斐睦朗

編集委員

荻野綱男
近藤泰弘
杉戸清樹
高木展郎
井上 優
笹原宏之
渋谷勝己

日本語学
Nihongogaku
vol.30-14

11月臨時増刊号 第30巻第14号 通巻第387号

平成23年11月15日 発行

編集兼発行人 三 樹 敏

印刷者 西 村 正 彦

発行所 明 治 書 院

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-1-7

電話番号 03(5292)0117 (代表)

振替口座 00130-7-4991 番

ホームページ <http://www.meijishoin.co.jp>

Eメール info@meijishoin.co.jp

©株式会社 明治書院
2011 Meijishoin Co.,Ltd.

6 社会言語学・方言研究

バリエーション研究の新たな展開

高野 照司

ことばのバリエーション研究における新たな波

ことばの研究において、理論言語学とは対極的に、話者の実際の発話資料（言語運用）をなんらかの系統だった方法で分析する研究は一般に「社会言語学」と称される。しかしながら、同じ「社会言語学的」研究であっても、ことばの「社会性」をどれだけ突き詰め、言語理論の一部として統合するかにおいてはかなりの温度差がある。ことばのバリエーション研究は、「社会言語学」と称される研究の中でもとりわけ、ことばの持つ「社会的次元」を深く掘り下げ、能弁に解き明かしたという点において他に類を見ない。

本章で詳しく論じたい「バリエーション理論」（変異理論・バリエーション言語学とも呼ばれる）は、ちょうどノム・チョムスキーの生成文法理論が脚光を浴び始めた1960年代以降、米国人言語学者ウィリアム・ラバブ（William Labov）とその後継者たちがもたらした一連の研究成果を土台としている。バリエーション理論が生まれる以前の言語学は、言語運用には必然的に観察される「揺れ」（変異）を「自由変異」とみなし、ことばの研究においては一過性の取るに足らない事象として分析から除外していた。しかし、バリエーション理論は、むしろこの「揺れ」を「言語知識固有の要素」として研究の中核に据えた。それまで軽視されてきた言語運用上の変異を系統だった手法で分析することで、自然な言語運用に観察される変異には一定の規則に基づいた秩序が内在しており、どのような人々（話者）が、どのような状況や場面でその変異を用い、どのような動機でそれを拡散させていくのかなど揺れながら変化するという特性を必然的に持つことばの実像に迫る言語理論の基盤を整えた（Chambers 2009）。

以下では、ことばのバリエーション研究の進化のプロセスを三期（「三つの波」）に分け紹介するが（Eckert 2005）、特に近年の新たな展開として第二・第三の波に焦点を当て、ことばのバリエーション研究がもたらし得る言語研究の新たな可能性について考察を加えたい。

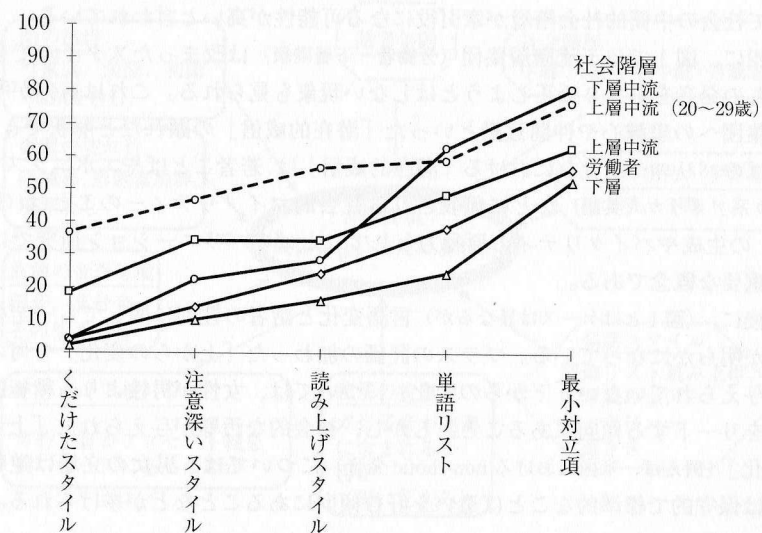
第一の波： 言語運用に潜む秩序の発見

言語学において、バリエーション研究がもたらした大きな貢献の一つに、それまでタブー視されてきた言語運用（実際の発話）を斬新な方法論で体系的に分析し、そこに潜む規則性（秩序）の存在を経験的に立証したことが挙げられる。

初期の研究では、主に年齢・性別・社会階層・人種・民族性といった話者の「社会的属性」や発話の改まり度（スタイル）などを活用し、それらと言語運用上の揺れの規則的相関を立証した。ことばのバリエーション研究ではあまりにも有名な図1は、ニューヨーク市英語における母音直後の(r)の発音（part, short, bird, guardなど）の揺れの中に「社会的次元」から派生する「規則性」が存在することを示している（Labov 1966, 2006）（注1）。

第一に、各社会階層集団内において当該発音（母音直後の(r)）の使用は極めて等質的であることが分かる。各階層の構成員（話者）は、誰から教えられたわけでもなく所属する集団に平均的な使用割合を「言語知識」の一部として備え持っていると言える。第二に、発話の改まり度（スタイル）に応じて（横軸）、全社会

図1 ニューヨーク市英語の母音直後の(r)発音における社会階層とスタイルの規則的相関（Labov 1994: 87）



くだけたスタイル ← → 改まったスタイル

階層が標準的とされる rhotic な発音へシフトしている。このことから rhotic な発音への変化は、その当時ニューヨーク市では公に認められ「威信」と考えられていたと解釈できる。第三に、上から二番手集団である下層中流階級が改まったスタイルにおいて、最上位集団（上層中流階級）を凌ぐほどに発話の「過剰矯正」を行う現象も見られる。この現象は、当時進行中であった rhotic な英語への変化が特にこの階層集団によって牽引されているという証と言える。

このような社会階層・発話スタイルの規則的相関は、その後数多くの言語共同体で繰り返し立証され、ことばの変異や変化に関わるいくつかの普遍法則が提唱されてきた。例えば、異なる発話スタイルにおける揺れの実態を見ることで、進行中のことばの変化はその性質上、「(話者の意識の) 上からの変化」と「(話者の意識の) 下からの変化」に分類できることが分かった。「上からの変化」とは、上掲ニューヨーク市英語の(r)発音変異と同様、その言語共同体ですでに顕在化している変化、つまり話者(地域住民)自身がその変化の進行をすでに察知している場合を指す。(特に欧米の)先進国社会においては、一般に頂点から1つ下の「二番手社会階層」に属する人々が自分のことば遣いに敏感で強い上昇志向を持つことから「上からの変化」を推し進める傾向にあるとされている。それとは対照的に「下からの変化」とは、ある社会的評価が未だ与えられていない段階にある比較的新参の変化(例えば、日本語の「ら」抜きことば)(Matsuda 1993)であることが多く、概して社会の中間的社会階層が牽引役になる可能性が高いと言われている。

第四に、図1では下流階層集団(労働者・下層階級)は改まったスタイルでも自分たちの発音をあまり矯正しようとはしない現象も見られる。これは自分が所属する集団への忠誠心や仲間意識といった「潜在的威信」の顕れだと解釈できる。ことばのバリエーションにおける「潜在的威信」は、若者ことばやエポニクス(アフリカ系アメリカ人英語)などに代表される社会的マイノリティーのことば(社会方言)の生成やバイタリティの原動力としてことばのバリエーション研究では極めて重要な概念である。

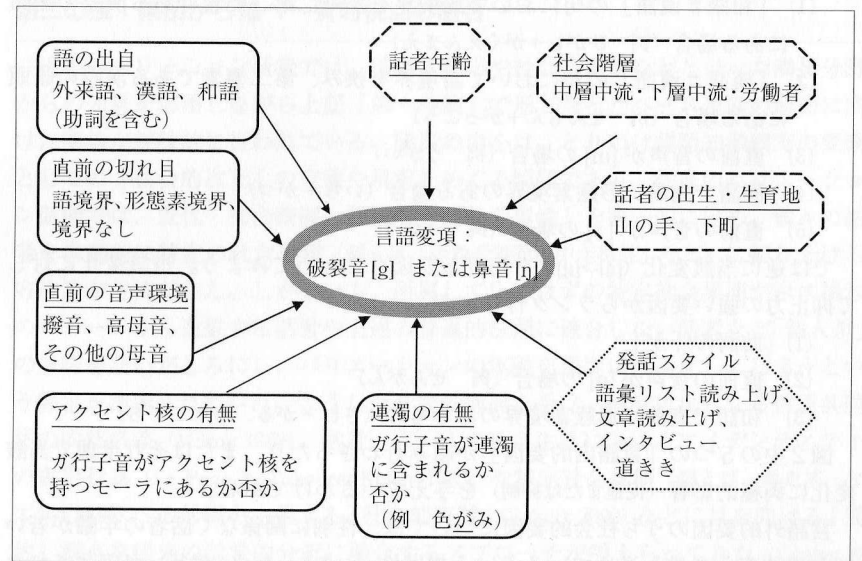
最後に、(図1とはケースは異なるが)言語変化と話者の性別に関しても一定の法則性が明らかになっている。プラスの評価の加わった「上からの変化」や何の評価も与えられていない「下からの変化」については、女性が男性よりも積極的に変化をリードする傾向にあること。しかし、社会的な汚辱が与えられた「上からの変化」(例えば、米国における non-rhotic 発音)については、男女の立場は逆転し女性は保守的で標準的なことば遣いを好む傾向にあることなどが挙げられる。

バリエーション理論的検証アプローチ

上掲 Labov (1966) による研究のインパクトがあまりに鮮烈だったためか、ことばのバリエーション研究と言えば「揺れを示す言語特徴と話者の社会的属性との相関関係を実証するのが最大の関心事」という誤ったステレオタイプがはびこっているように思う。しかし、話者の社会的属性や発話スタイルとの規則的関係(図1)は話者が持つ「言語知識(文法)の一構成要素である「社会的次元」を記述したに過ぎなく、バリエーション理論の学術的ゴールはさらに奥深い。この点を見極めるために日本語における先駆的研究(Hibiya 1988)を例にとり、バリエーション理論的アプローチとはいかなるものか、さらに詳しく解説を加えたい。

図2では、東京方言で当時進行中であったガ行子音の変化(破裂音化)に関して Hibiya (1988) が行った調査の概略を図解した。話者 97 名からのインタビューデータを分析した結果、少なくとも 9 種類の変数(図1)が話者による当該音声の選択([g]か[n]か)に影響を与えていることが判明した。揺れが見られる「言語変項」(ガ行子音の破裂音または鼻音)を「従属変数」、その揺れを左右すると仮

図2 東京方言におけるガ行子音の揺れに関するバリエーション理論的アプローチ(筆者による Hibiya 1988 の図示)



□ 言語内的要因 □ 言語外的(社会的)要因 □ 言語外的(スタイル的)要因

定される諸要因(制約要因)を「独立変数」として、各要因の影響力および互いの力関係(ランキング)を計量的に測定するという仮説検証型のアプローチをとる。

実際の発話において何らかの「ゆれ」を支配する制約要因が単一(つまり、一対一の関係)であることは極めて稀で、少なくとも発話時の言語変項(ガ行子音)を取り巻く言語的環境から派生する「言語内的要因」(図1「語の出自」「直前の切れ目」「直前の音声環境」「アクセント核の有無」「連濁の有無」)と、年齢・社会階層・話者の生育地など一連の話者属性(社会的要因)や異なる発話タスクから派生するスタイル差(スタイル的要因)などの「言語外的要因」が一斉に当該変項の産出に作用し、互いに競合し合いながら最終的に「ゆれ」の度合いが決定される仕組みになっている。加えて、これまでの研究成果から通常、揺れを示す言語変項(従属変数)に対し最も強い影響力を持つ独立変数は「言語内的要因」であることが多く、次いで「社会的要因」・「スタイル的要因」の順にその影響力は弱まること分かっている(Bell 1984, Preston 1991)。

Hibiya (1988) の検証によれば、東京方言におけるガ行子音のバリエーションに内在する規則性は以下のように整理される。当該変化([n]→[g])にプラスの貢献度の高いもの、つまり変化を促進する影響力の強い要因からランク付けをする(日比谷 1987)。(紙面の都合上、網羅的ではない。)

- (1) 「和語#漢語」の句において語境界を挟み、第二要素である漢語の語境にある場合(例 ひがし+がくえんまえ)
- (2) 「漢語#漢語」の句において語境界を挟み、第二要素である漢語の語境にある場合(例 せんもん+がっこう)
- (3) 直前の音声が[u]の場合(例 うがいがい)
- (4) 漢語で直前に形態素境界のある場合(いち+ががつ)
- (5) 直前の音声が[i]の場合(例 いがいがい)

では逆に当該変化([n]→[g])を妨げる要因もまとめてみよう。当該変化に対して抑止力の強い要因からランク付けする。

- (1) 助詞の「が」
- (2) 直前の音声が[n]の場合(例 せんがん)
- (3) 和語で直前に形態素境界のあるもの(さむ+がる、あり+がち)

図2中の5つの「言語内的要因」が組み合わさったり、またはそれ単独で当該変化に両極の影響(促進または抑制)を与えているわけである。

言語外的要因のうち社会的要因については、性別に関係なく話者の年齢が若いほど当該変化を推し進めているという規則性(つまり、変化の進行)が確認された。また、社会階層よりも話者の出生・生育地が変化を促進する要因としてはより重

要で、下町に住んでいる話者でも通学などで「山の手」と関連の深い社会生活を送った話者の間で変化がより進行していた。発話スタイルについてはより改まったスタイル(語彙リストや文の読み上げ)で[g]の使用が顕著であることから、上述のニューヨーク市英語の(r)発音の変異と同様、東京方言における当該バリエーションは社会的威信をもつ「上からの変化」だと判断できる。

言語運用における何らかの使用頻度に着目した「社会言語学」と称される従来の研究の大半は、社会的要因(例えば、性差)が関心の中心で、図2が示すような言語内的要因を含めた同時複合的な制約要因間での相対的かつ両極的な影響力を勘案して、バリエーションに内在する規則性の記述を行ってほかなかった。ある変数が真に揺れに影響する要因であると結論づけるには競合する他の制約要因の貢献度の把握が重要であり、そうでなければ変異を固有要素とする言語知識の一部分を明らかにしたに過ぎないと言える。バリエーション理論では、言語運用データ用に改良された多変量解析の一種である VARBRUL プログラム(詳しくは松田 2006 を参照)を用いて複数の制約要因間の相対的効果を指数化し、各制約要因が他要因と比べてどの程度の影響力を発揮するのかを予測し、その言語学的解釈を求めていくという分析プロセスを経る(Sankoff 1985, 1986; Young & Bayley 1996)。

第二の波：集団から個へ～質的視点の融合～

近年のバリエーション研究では、言語人類学や社会心理学などといった隣接分野からの知見を応用しながら上記「第一の波」で形となったベース理論の研磨に向けた議論が継続的に行われている。議論の中心は、とりわけ言語知識固有の要素としての「社会的次元」の定義や解釈をめぐる問題である。従来のバリエーション研究では、世代・社会階層・性別など「話者属性」を画一的に定め、個々の話者を自動的に特定の社会集団(例えば「労働者階層の中年男性」など)に振り分ける方法論が主流だった。しかし一方、所属しているはずの特定社会集団が示す揺れのパターンから逸脱する話者や上述の普遍的法則に適合しない話者など「個人差」の意味をないがしろにし、バリエーションの実態を過度に単純化してしまうという弊害が指摘されていた。こうした学問的進展を受け、研究対象となる言語共同体の内部格差(Milroy 1980)、話者一人一人の社会生活におけるアイデンティティの表出行為(Le Page & Tabouret-Keller 1985)や特定社会集団(例えば、暴走族・マスコミ関係)への帰属を主張する「社会的実践」(Eckert 2000)などに目を向ける「質的」視点を従来の計量的分析に融合するアプローチが唱えられてきた(Coates & Cameron 1988, Graddol & Swann 1989, Eckert & McConnell-Ginet 1992)。ことばのバリエ

エーション研究の新次元をきり拓く画期的な出来事だと言える。

話者の社会生活とことばのバリエーション

より質的な観点から話者特性を分析に融合した先駆的な研究に池上他(1977)がある。北海道西北部(留萌管内)の海岸沿いに位置する増毛町(人口1万人弱)をフィールドに「浜ことば」の共通語化および「新方言」(注2)の様相(表1)に関する大規模調査が行われた。調査の最大の力点は、共通語化の地域内格差を視野においた「全数調査」にあり、性格の異なる三集落(市街地・農村部・漁村部)において全住民を対象に質問調査票と絵カードによる面接調査(計505名)が行われた(注3)。各集落ごとのコミュニケーション構造(住民が作り出す相互交渉の仕組み)の特色や各住民(話者)の日常的コミュニケーション活動(日常生活で頻繁に話をする相手は誰か)の内容、また、各住民の通婚圏(父母や配偶者は当該集落の出身か否か)、購買圏や医療圏(近隣都市への依存度)、通勤・通学圏などを調べることにより、どれだけ地元に着した社会生活を共有しているのかを把握した。

三集落に共通して若い世代(特に昭和戦後生まれ以降)における共通語化の飛躍的な進行が確認された一方で、地元密着度や日常的なコミュニケーション活動(日常よく話す相手は誰か)との関連で共通語化における集落間の格差が明らかになった。漁村部 < 農村部 < 市街地の順で共通語化の進展(同時に「浜ことば」の衰退)が見られた。共通語化が最も遅れている漁村部集落は、部落ぐるみでの出稼ぎ労働が多く地元密着度の濃い地域であり、共通語化の最も速い市街地は職業域活動

表1 増毛町における「浜ことば」・「新方言」の項目例(池上他1977より一部抜粋)

	浜ことば	新方言
音韻 (括弧内は語彙例)	母音イ・エの混同(息・駅)、シ・ス(辛子・烏)など子音区別の有無、カ・タ行子音の濁音化(猫・桜・受付、鳩・咲いた)	
語彙アクセント (括弧内は共通語読み)	ネコ'(ネ'コ)、ウチワ'(ウチ'ワ)、セナ'カ(セナカ)、カラ'ス(カ'ラス)	
文法 (括弧内は共通語形)	オキレ(起きろ)、ナクシナイ(無くさない)、イクベ(勧誘)(行こう)、コイバ・コレバ(来れば)	イーショ(推量) (いだろう)
語彙 (括弧内は共通語形)	ナンボ(いくら)、ヤワイ(柔らかい)、イタマシー(惜しい)、カシガル(傾く)、カツケル(罪を人に)なすりつける)、カマス(かきまぜる)、シャッコイ(冷たい)、モチョコイ・コンバイ(くすぐったい)	ウズマキ(つむじ)、アオタン(あざ)、コチョコバシイ(くすぐったい)

に関わる人の出入りの激しい地域であった。日常的なコミュニケーション活動においても、家族・隣近所・友人・親族を中心とした「内集团的」相互交渉がその大部分を占める漁村部や農村部に比べ、市街地では職業(商売・事務職等)に関わる「外集团的」相互交渉が親族とのそれを上回る都会的な性格が明らかになった。また、前者二集落では世代間コミュニケーションも活発で、孫とよく話す老年層が浜ことばを多く留め、祖父母とよく話す少年少女が新方言を推進する集団であることも分かった。さらに池上他(1977)では、同じ「浜ことば」の使用地域である岩内町(後志支庁管内)で進行する共通語化との「地域間格差」も論じられており、二つの地域(増毛・岩内)間での差異よりも各地域の「内部格差」がより顕著である事実から、全数調査の重要性や個人差とその社会的背景に関する入念な調査の必要性が示唆されている。

話者属性の動的解釈

上記の質的観点の融合に関連し、話者属性として代表的な「性別」を巡る議論も活発化した。例えば、話者の生物学的な「性別」(sex)に基づく従来の分析アプローチは批判の矢面に立ち、社会的に構築される動的な概念(gender)として「性」の再解釈が唱えられた(Delphy 1981, Llewellyn 1981, Cameron 1985)。例えば、日本語の格助詞「は」「が」の消去(従属変数)が女性特有のバリエーションであるとするShibamoto(1985, 1990)の研究成果に対し、Takano(1998)は会話参与の性別構成(同性間会話 vs 異性間会話)という観点から再検証を加えた。その結果、当該変項の「女性」との規則的相関は、同性間会話においてのみ観察できるものであり、男女が交わる異性間会話においては性差はほとんど観察されなかった。これは仲間意識を共有する二つの性集団間(親しい友人同士の異性間会話)で無意識的に生ずる心理的収束の顕れであり、男性話者は女性話者の消去率へ、女性話者は男性話者の消去率へと互いの歩み寄りの結果生じた発話応化現象と解釈できる(Giles & Coupland 1991)。実生活で当たり前遭遇する異種社会集団(ここでは異性)との会話参与形態において、話者はある社会的意味を持つことばのバリエーション(ここでは格助詞の消去)を状況により能動的(時に方略的)に活用する。当該研究では、「性別」という固定的話者属性をより臨機応変な動的変数として捉えることの重要性が改めて確認された。

生涯変化への視点

従来の(とりわけ海外での)ことばのバリエーション・変化研究の主流は、現時点で観察される世代差を過去から現在にかけて生じた変化の投影と見なす「見か

「見かけ上の時間」に基づいている (Chambers & Trudgill 1998)。時の流れを一コマのスナップショットのように今この瞬間で止め、現時点で観察される世代間差異を過去の解釈や未来の予測に役立てようという考え方である。そもそも言語変化の「見かけ上の時間」的解釈は、「個人語は一生涯不変」、即ち、各世代の構成員一人一人の言語は言語形成期 (おおよそ15歳くらいまで) 以降、時を経ても変化しない安定した体系であるという大前提に依拠している (Chambers 2009)。しかし、近年の研究動向を見ると、実時間研究の重要性を再認識し、「個人語不変」の前提を取って検証する研究が増えてきている。その結果、個人語は人生経験や社会変動を経て変化するという「生涯変化」の可能性を指摘する研究が少なからずある (Kerswill & Williams 2000; Sankoff & Blondeau 2007 など)。

一方、個人語の不変性は言語領域によって異なるとみなし限定的に捉える立場もある。一般に、語彙については職業を中心とした様々な生活経験を通して変わりやすいが、音声面 (特にアクセントなどの韻律面) は変わりにくいと言われている (Chambers 2009)。国立国語研究所 (1997) は、1986年に北海道富良野市で、25年前の先行調査 (1959年) に参加した住民106名を対象に生涯変化に関する経年調査を行っている。その結果、語彙・名詞アクセントにおける共通語への生涯変化は確認されたが、分節音 (ガ行鼻音の破裂音化) については生涯変化は見られなかった (cf. 国立国語研究所 1953, 1974, 1994)。

高野 (2011) は、札幌市中央区山鼻で20年前に行われた先行研究 (小野 1991, 1993) と同じ調査協力者の中から現在60・70歳代 (当時40・50歳代) の話者10名 (男5・女5) を対象に、前回調査と同一の調査票 (文章読み上げ) を用いて、名詞アクセントの共通語化における生涯変化を検証した (表2)。

名詞の拍数や語彙種により共通語化 (または方言形保持) の度合いにばらつきはあるが、圧倒的多数の話者 (10名中9名) において「生涯変化」と言えるほどの経年的変化は確認されなかった。20年の歳月を経て、それぞれの個人語 (ここでは名詞アクセント体系) はそれほど大きく様変わりはしていないと言える (図3, 4は結果の一部)。10名中9名で、図3の62歳男性kr・63歳女性hh・図4の64歳男性tkが示すような、経年的変化のほとんど見られない安定した変異パターンが得られた。本小規模調査に関する限りでは、「見かけ上の時間」解釈に基づく言語変化研究の妥当性や言語の諸領域で最も変わりにくいのは韻律面だとする一般化を支持する結果が得られた。

一方、札幌方言を対象に約20~25年前に行われた先行研究 (尾崎 1986, 1989; 小野 1991, 1993) によれば、調査当時に30歳代 (現在50歳代) 話者を境に急速な東京語化の進行が確認されている。今回の調査で明らかになったアクセント体系に

表2 分析対象名詞1~4拍のアクセント類型 (共通語型) と具体例 (高野 2011)

1拍 (15項目)	I類 (○▼)	柄が・血が、など5項目
	II類 (○▼)	葉が・日が、など3項目
	III類 (●▼)	絵が・歯が、など7項目
2拍 (60項目)	I類 (○●▼)	鼻が・飴を、など12項目
	II類 (○●▼)	橋が・紙を、など12項目
	III類 (○●▼)	花が・髪を、など12項目
	I・V・V類広母音 (●○▼)	空が・船が・糸が、など12項目
	IV・V類狭母音 (●○▼)	箸が・松が、など12項目
3拍 (46項目)	A型 ○●●▼	机・背中、など21項目
	B型 ○●●▼	毛抜き・力、など7項目
	C型 ○●○▼	小麦・つつじ、など3項目
	D型 ●○○▼	姿・命、など15項目
4拍 (25項目)	○●●●▼	そろばん、など
	●○○○▼	挨拶、など
	○●○○▼	果物、など
	○●●○▼	大雨、など
	○●●●▼	弟、など

図3 62歳男性kr, 63歳女性hh

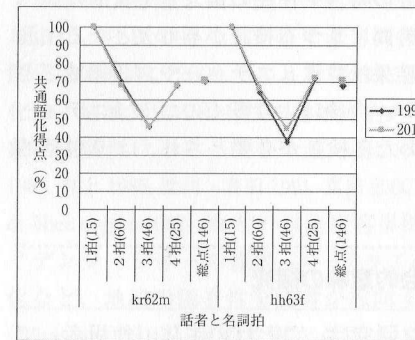
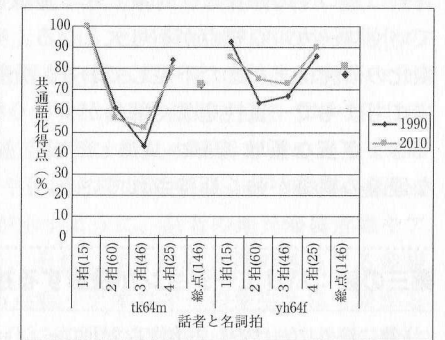


図4 64歳男性tk, 64歳女性yh



(図3・4とも高野 2011 より一部抜粋)

における個人語の不変的特性については、現在50歳代以下の比較的若い世代を分析に含めるかたちで、今後も検証を続けていくつもりである。

一方、「個人語の不変性」が主流の中であって、共通語化への生涯変化を示す話者が一名いた (図4, 64歳女性yh)。当該話者に関してインタビューで知り得た情報 (20年間での生活上の変化、山鼻地区の変化、方言・標準語意識、趣味や習い事、町内会活動などを含めた日常生活の様子など) から、他の話者とは特に対照的な「話者

特性」がいくつか浮かび上がった。その一つは、「家庭生活」における「他方言との接触」である。話者 yh の配偶者（4年前に死去）は、横浜出身者で「綺麗なことば遣い」（本人談）をいつもしており、「自分も綺麗なことばを使いたい」という願望が常日頃あったという。そのせいか、自分のことば（札幌方言）は方言だという意識が強く、ことば遣いにはいつも気を遣っていたという。これと関連し、ことば遣い全般（自分のことば・他者のことば・方言・標準語）への意識や評価、感覚に関わる語りが能弁だったことも話者 yh の特筆すべき点である。話者 yh は、職業を中心とした社会生活においても、とりわけ他の女性話者とは対照的であった。高校卒業後、大手銀行の窓口業務に15年間携わり、33歳で配偶者の転職を機に飲食店を開業（12年前に廃業）。過去20年間での生活上の大きな変化に関する問いに、飲食店の開業と廃業を第一に挙げた。職業的ニーズから比較的広範なコミュニケーション網の中で様々なことばと接する機会が多かったという事実が指摘できる（cf., Nichols 1980, 1983; Takano 2000, 2001）。

生涯変化は、個々の話者の社会生活の内容（社会網など）、地元との結びつきの度合い（土着性やアイデンティティー）、そして方言・標準語への態度などの価値観と密接に結びついているため、実時間による追跡調査を行い、同一話者のことばが一定の時を隔てどのように変わったのか、変わったとすればどのような社会的背景に基づくのかなど、対象となる地域社会の特性や住民の個人差を質的に調べていくローカルな視点が不可欠となる。実時間に基づく検証が不可欠となる生涯変化の研究はまだ不足しており、分析結果はコミュニティーや言語領域ごとにまちまちで一貫性を欠く部分が少なくない。今後はより多くのコミュニティーでさまざまな領域（語彙・文法・音声面）にわたる検証が必要とされ、より包括的な理論の構築が強く期待されている。

第三の波：バリエーションが投影する社会的意味の探究

（特に海外における）近年のバリエーション研究は、ことばの主体（使用者）である話者の社会生活や心理面など社会的次元への質的洞察を加えることによって、計量的分析から特定されるバリエーションの持つ「社会的意味」を検証する「第三の波」へと学問的進展を見せている（Eckert 2005）。言語運用上のバリエーションは、個々の話者が日常的に行う「社会的実践」（social practice）の反映であり、地元 roots に根ざした話者の生活経験やそれを通して形作られるアイデンティティー（自分らしさ）など、様々な実生活要因が複合的に絡み合う動的な社会構築概念として再解釈が行われている（Eckert & McConnell-Ginet 1992, Eckert & Rickford 2001）。

日常生活の中で類似の社会文化活動・信条・価値観および言語運用を共有する住民（話者）たちは、日常の社会的実践を通して自己実現の場（Community of Practice）を共有し、その中である特定のバリエーションは何らかの社会的意味を与えられ、自己または所属集団の社会的アイデンティティーの証として誇示・主張されていくことになる（Eckert 2000）。要するに、ことばのバリエーションとは、社会生活の様々な場面で話者により構築されるダイナミックな実在であり、その社会的意味を自己確認し、他者へも伝ようとする実践こそがことばのバリエーションを動機づける重要な要因の一つと捉えることができる。さらには、ある特定の社会的意味を持つバリエーションが、当該地域社会全体のなかでどのように埋め込まれ、伝播していくのかなどといった言語変化メカニズムの解明が今後のバリエーション研究における重要な課題となってくる（Milroy 2004）。

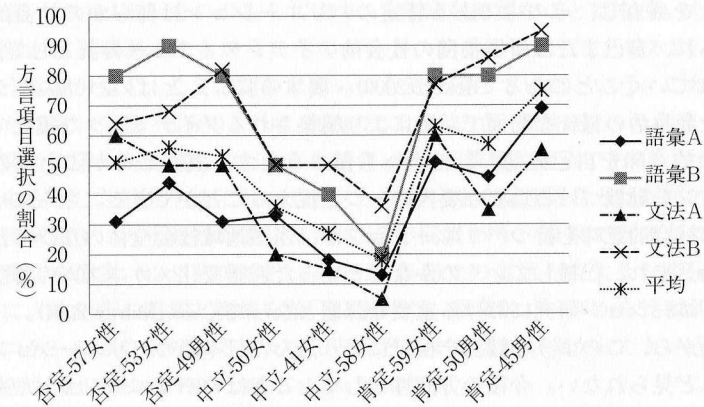
残念ながら、このような観点を検証に盛り込んだ日本語のバリエーション研究はほとんど見られない。今後の方向性として、ことばのバリエーションや変化の背景となる話者の心理的側面やアイデンティティーに着目する研究が積極的に行われていくべきだと言える（真田・ロング 1992, 真田 1999）。

地域社会のグローバル化における土着イデオロギーとことばのバリエーション

筆者は、急速なグローバル化が進む北海道ニセコ町（後志支庁管内）をフィールドに、住民の抱く「土着イデオロギー」（注4）と当該地域方言の共通語化の関係に着目し、2009年より継続的に言語調査を行っている（注5）。グローバル化は、地域文化の固有性や地域方言のバイタリティーを減退させる「均一化」現象と位置付けることができる一方、共通語化とは相反する新方言の誕生（永瀬 1984, 井上 1985, 徳川・真田 1991, 真田 2000）や民族方言の固持（Labov 1963, Meyerhoff & Niedzielski 2003）などの言語変容事例が示すように、話者の地元帰属意識やアイデンティティーの復興（ローカリズム）、それに伴う地域方言のさらなる多様化など、地域の固有性を話者が志向する逆転イデオロギーの芽生えにも繋がる（Johnstone 2004）。町の急激なグローバル化に直面する住民（話者）が、その変化に対しどのような意識や態度で社会生活を送り、それらが現時点で観察される当該地域方言のバリエーションとどのような規則的關係を持つのかなど、特に話者たちの土着意識やアイデンティティーなど社会心理面に焦点を当てながら、当該方言のバリエーションが投影する社会的意味の把握を試みる。

予備分析の成果ではあるが、これまでいくつか興味深い発見があった。図5は、北海道方言的語彙および文法の使用に関して行ったアンケート調査の結果を、紙面の都合上、中年層の生え抜き住民9名（男3, 女6）に限定してまとめた。各住

図5 ニセコ町における中年層話者の方言使用意識と土着イデオロギータイプ



民とはインタビューも行い、地域のグローバル化に対する意識や態度についての情報も収集した。それを基に、各住民を以下の3種類の「土着イデオロギータイプ」に分けた。

- A ニセコ地区の社会変化へ否定的・反対意見を持つ話者(図5横軸「否定-年齢-性別」として表示)
- B 社会変化へは中立的立場、またはどちらの立場もはっきりとは示さなかった話者(図5横軸「中立-年齢-性別」として表示)
- C ニセコ地区の社会変化へ肯定的・前向きな意見を持つ話者(図5横軸「肯定-年齢-性別」として表示)

一般的に、グローバル化に肯定的な態度をとる住民は若年層に多く、否定的な態度は老年層住民に多かった。図5が示すように、中年層住民(図5)においては異なる態度が混在していた(否定3・中立3・肯定3)。全世代を通して、グローバル化に対し肯定的な意見を述べる住民には共通して「地元との密度の濃い関わり合い」が挙げられる。NPO 団体幹部、商工会議所青年部役員、民生委員など変化する地域社会の最先端で積極的に地元の社会活動に貢献・参与している人々がほとんどであった。それとは対照的に、中立的な立場をとる(または何も意見や感想を表明しなかった)住民は、おしなべて地域の変化に比較的無関心か、日常生活の中でそれをほとんど実感していない人々が多かった。

図5からは特定の土着イデオロギータイプと方言使用(意識)割合において、興味深い相関が見られる。過去の類似の研究(Labov 1963など)では、地域社会

の変動に否定的な住民が、郷土への忠誠心や帰属意識から「ローカリズム」を主張する。そのような社会的意味の伝達手段として当該地域に特徴的な言語変項を誇示する傾向は、ニセコのグローバル化に否定的なスタンスをとる話者においても、(少なくとも方言使用意識上は)一貫して見られる。それは図5の中年層3名(否定-57女性、否定-53女性、否定-49男性)の示す高い方言使用(意識)の割合に明確に現れており(平均点ラインを参照)、紙面の都合上掲載できないが、若年層と老年層住民においても類似の傾向が見られた。

一方、図5では、過去の研究ではあまり指摘されてこなかった新しい発見もある。ニセコのグローバル化に肯定的なスタンスをとる住民たちにおいても、否定的な住民と同様、地域方言への強い志向性が一貫して観察される。中年層3名(図5、肯定-59女性、肯定-50男性、肯定-45男性)は、特に高頻度の方言使用(意識)を示す(掲載しないが若年層においても同様)。このことから、地域社会のグローバル化を受容する住民が当該方言の衰退(共通語化)を押し進める中心的勢力になるわけでは必ずしもなく、むしろ日々変化する地域社会と積極的に向き合い新しい変化と融合する社会生活を送ることで、グローバル化に否定的な住民とは異なる類の「ローカリズム」をかたち作り、地域方言の保持に貢献していると言えそうである。

最後に、方言使用意識から少なくとも推察できることとして、当該方言の共通語化を進める母体は、地域の社会変化に比較的無頓着で拘りがなく、地元で先端的な社会活動に参与する機会をあまり持たないごく一般的な住民である可能性が高い。否定派・肯定派住民と比べ、地元への帰属意識が比較的薄い住民と言えよう。

自然談話にみる土着イデオロギーの顕在化

地域の急速なグローバル化に対する住民のローカリズムは、実際の言語運用の中でどのように顕在化するのだろうか。本予備分析では、調査協力者の中でもとりわけ地域のグローバル化に対し否定的なイデオロギーを雄弁に語った話者1名(図5、否定-49男性)をケーススタディとして取り上げ、特に音声面のバリエーションについて「話題」との相関に着目して分析する。当該話者(49歳男性・自営農業)は、ニセコ町の農家の長男として生まれ育ち、20代前半に冬の出稼ぎとして数ヶ月を本州で過ごした以外、外住歴はない。家業である農業を継いで四代目となる。ニセコのグローバル化に関しては、特に自然破壊や土地(特に水資源)の買い占めなどに対し強い反対意見を述べていた。

約1時間半に及ぶインタビュー音声に基づき、特に以下の変項(1)、(2)の揺れに内在する規則性をインタビュー内容(話題)との関係に着目して検証した(cf. Rickford & McNair-Knox 1994)。

表3 49歳男性自営農主の音声バリエーションと話題の規則的關係

	人物背景	幼少時代	グローバル化 意識・態度	農業 やりがい・想い	計
カ行 有声化	37.5% (3/8)	50% (14/28)	64.4% (29/45)	53.8% (14/26)	56.1% (60/107)
タ行 有声化	9.1% (1/11)	17.5% (7/40)	23.7% (9/38)	26.9% (7/26)	20.9% (24/115)

- (1) 「語頭以外のカ行子音の有声化」(池上他 1977, 北海道方言研究会 1978, 国研 1997): ネゴ(猫)・セナガ(背中)・ニセゴ(ニセコ)・言ったゴト(事)に・陰にカグレテ(隠れて)など
- (2) 「語頭以外のタ行子音の有声化」(池上他 1977, 北海道方言研究会 1978, 国研 1997): ハド(鳩)・コドシ(今年)・親がタテデ(建てて)・そんどキ(その時)など

全般的にタ行子音(平均20.9%)よりもカ行子音の有声化(平均56.1%)の割合が高い(表3)。インタビュー内では、生い立ちや家族構成などについて尋ねた「人物背景」(図6、7)、幼い頃のニセコや学校での出来事・よくした遊びなどについて尋ねた「幼少時代」、ニセコのグローバル化に対する個人的意見や感想を尋ねた「グローバル化」、自分の仕事(農業)への想いややりがいを尋ねた「農業」などの話題について語ってもらったが、図6、7から各変項の使用上のバリエーションにはそれらの話題特性との明らかな規則的相関が確認できる。

図6から、グローバル化に対する否定的なイデオロギーと関連する話題(「グローバル化」)において、当該話者は方言的特徴である「カ行子音の有声化」(64.4%)を最も頻繁に用いていることが分かる。また、社会全般に若者や都会人などから敬遠されがちな農業という仕事への熱い想いややりがいを語る場面(「農業」)においても、当該変項は高い頻度で用いられている。こうした傾向は、カ行子音に比べ全般的に使用頻度の低い「タ行子音の有声化」においても同様で、どちらの話題においても平均(20%程度)を上回る頻度で用いられている(図7)。当該話者の生い立ちや家族構成などを尋ねる比較的中立的な話題から、より「日常語」を使うとされるカジュアルな場面(表3幼少時代、図6、7幼少時代)へ話が移るにつれ、どちらの変項の使用においても徐々に頻度が増す。そして、地域のグローバル化への個人的意見を表明したり、農家としての自己の社会的アイデンティティーを主張する場面においては、さらに高い使用頻度を示し、当該話者の語りにはより方言的特徴が誇示されることになる。

以上のように、インタビュー時における「話題」と密接に関わる規則的変異から、

当該音声変項が話者の土着イデオロギーを主張する言語的リソースの一つとして活用されていることは明らかである。これは、先に概説した方言使用(意識)と土着イデオロギーの相乗的な関係と同様、自然談話という実際の言語運用においても、(おそらく無意識的に)話者は音声という仔細なバリエーションを通して、土着イデオロギーを顕在化させていると言える。

急速なグローバル化が進む今日の世界社会において地域方言の共通語化は極めて自然な成り行きと言える。しかし、それとは逆行するかたちで地域の固有性や土着性を誇示・主張するイデオロギーの草の根的な芽生え

やそれと密接に関わる地域方言の保持などローカリズムの復興については、これまでのバリエーション研究において本格的な調査は行われてこなかった。急速なグローバル化が進む地域社会(ニセコ)をフィールドにした今回の調査結果から、予備的分析の段階ではあるが、住民たちの方言使用意識や実際の言語運用におけるローカリズムの顕れ、それと相乗的な関係にある地域方言保持の可能性が示唆される。今後もこの可能性の探究を継続して行っていくつもりである。

注

- 1 この調査が行われた1960年代初頭は、母音直後の(r)を発音しないこと(non-rhotic)がニューヨーク市英語の主流だったが、第二次世界大戦(1940年代)以降、全国的に標準とされる(r)を発音するrhoticな発音へと変化が進行中だった。

図6 49歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のカ行子音有声化×話題

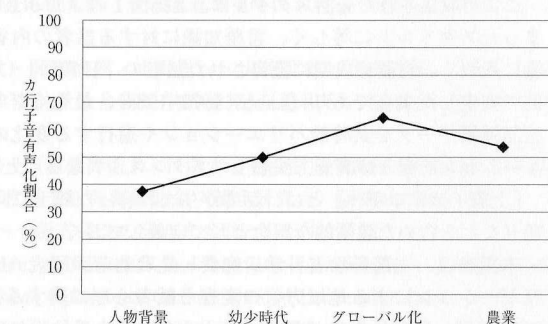
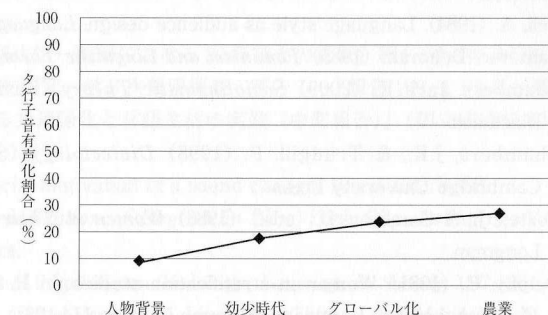


図7 49歳男性自営農主の談話音声における語頭以外のタ行子音有声化×話題



- 2 「若い世代において、新たに発生し、又は勢力をひろげつつある非標準語形で、地元でも方言扱いされているもの」(井上 1983:5)
- 3 ここで収集された発話スタイルは、上掲図1の「読み上げスタイル」以降の比較的「改まったスタイル」に等しく、言語知識に対する話者の内省や直観をより重要視する方法論に基づく。言語形成期に獲得された話者の「日常語」(くだけたスタイル)が最も規則的で安定した実在であり(Labov 1972, 1984)、最もくだけた場面における自然発露的な言語運用データを共時的バリエーションや進行する変化の分析基盤とみなす海外のバリエーション研究とは調査方法論上のスタンスが異なることを指摘しておく。
- 4 「土着イデオロギー」とは、話者が生まれ育った郷土に向ける愛着・帰属意識・忠誠心・誇りなどを含めた包括的な概念として定義しておく。
- 5 本調査は、文部科学省科学研究費・挑戦的萌芽研究(No.21652040)『急速なグローバル化による地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』(2009年～2011年度 研究代表者 高野照司)からの助成を受け行われている。

引用文献

- Bell, A. (1984) Language style as audience design. *Language in Society*, 13:145-204.
- Cameron, Deborah. (1985) *Feminism and Linguistic Theory*. London: Macmillan.
- Chambers, Jack K. (2009) *Sociolinguistic Theory* (Revised Edition). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Chambers, J.K., & Trudgill, P. (1998) *Dialectology* (Second Edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Coates, J., & Cameron, D. (eds.) (1988) *Women in Their Speech Communities*. London: Longman.
- Delphy, C. (1981) Women in stratification studies. In H. Roberts (ed.), *Doing Feminist Research*. London: Routledge & Kegan Paul. pp.114-128.
- Eckert, Penelope. (2000) *Linguistic Variation as Social Practice*. Malden, MA: Blackwell.
- Eckert, Penelope. (2005) Variation, convention, and social meaning. Paper presented at the Annual Meeting of the Linguistic Society of America. Oakland, California.
- Eckert, P., & McConnell-Ginet, S. (1992) Think practically and look locally: language and gender as community-based practice. *Annual Reviews of Anthropology*, 21:461-490.
- Eckert, P., & Rickford, J. (eds.) (2001) *Style and Sociolinguistic Variation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Giles, H., & Coupland, N. (1991) *Language: Contexts and Consequences*. Buckingham: Open University Press.
- Graddol, D., & Swann, J. (1989) *Gender Voices*. Oxford: Blackwell.
- 日比谷潤子 (1987) 「バリエーション理論」(『言語研究』88号、P.155-171)
- Hibiya, Junko. (1988) *A Quantitative Study of Tokyo Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.
- (1995) The velar nasal in Tokyo Japanese: A case of diffusion from above. *Language Variation and Change* 7: 139-152.
- 北海道方言研究会 (1978) 『共通語化の実態 ～北海道増毛町における3地点全数調査～』(北海道印刷)
- 池上二良・五十嵐三郎・柴田武・岡本次郎・小野米一・大山信義・井上史雄 (1977) 『北海道浜ことばの共通語化に関する計量社会言語学的研究』(昭和51・52年度文部省科学研究費(総合A)研究報告書)
- 井上史雄(編) (1983) 『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究—東京・首都圏・山形・北海道—』(昭和57年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書)
- (1985) 『新しい日本語～《新方言》の分布と変化～』(明治書院)
- Johnstone, Barbara. (2004) Place, globalization, and linguistic variation. In C. Fought (ed.), *Sociolinguistic Variation: Critical Reflections*. Oxford: Oxford University Press. pp. 65-83.
- Kerswill, P., & Williams, A. (2000) Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.
- 国立国語研究所 (1953) 『地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—』報告5 (秀英出版)
- (1965) 『共通語化の過程—北海道における親子三代のことば—』(国立国語研究所報告27)
- (1974) 『地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較』報告52 (秀英出版)
- (1994) 『鶴岡方言の記述的研究—第3次鶴岡調査 報告1—』報告109-1 (秀英出版)
- (1997) 『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』(国立国語研究所報告書)
- Labov, William. (1963) The social motivation of a sound change. *Word*, 19:273-309.
- (1966) *The Social Stratification of English in New York City*. Arlington, VA: Center for Applied Linguistics.
- (1972) Some principles of linguistic methodology. *Language in Society*, 1:97-120.
- (1984) Field methods of the Project on Linguistic Change and Variation. In J. Baugh & J. Sherzer (eds.), *Language in Use*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- (1994) *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*, Oxford: Blackwell, 1994.
- (2006) *The Social Stratification of English in New York City* (Second Edition), Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Le Page, R., & Tabouret-Keller, A. (1985) *Acts of Identity: Creole-based Approaches to Language and Ethnicity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Llewellyn, C. (1981) Occupational mobility and the use of the comparative method. In H. Roberts (ed.), *Doing Feminist Research*. London: Routledge & Kegan Paul. pp.129-158.
- 松田謙次郎 (2006) 「VARBRUL プログラムとは何か」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 9: 31-56.
- Matsuda, Kenjiro. (1993) Dissecting analogical leveling quantitatively: The case of the innovative potential suffix in Tokyo Japanese. *Language Variation and Change* 5 (1) : 1-34.

- Meyerhoff, M., & Niedzielski, N. (2003) The globalisation of vernacular variation. *Journal of Sociolinguistics* 7 (4): 534-555.
- Milroy, Lesley (1980) *Language and Social Networks*. Cambridge, MA: Blackwell.
- (2004) Language ideologies and linguistic change. In Carmen Fought (ed.), *Sociolinguistic Variation: Critical Reflections*. New York: Oxford University Press. 161-177.
- 永瀬治郎 (1984) 「都会の方言—東京」(『国文学解釈と鑑賞』5月臨時増刊号 P.143~157)
- Nichols, Patricia C. (1980) Women in their speech communities. In S. McConnell-Ginet et al. (eds.), *Women and Language in Literature and Society*. New York: Praeger. pp. 140-149.
- (1983) Linguistic options and choices for Black women in the rural South. In B. Thorne, C. Kramarae & N. Henley (eds.), *Language, Gender, and Society*. Rowley, MA: Newbury House. pp. 54-68.
- 尾崎善光 (1986) 「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇～」(『日本学報』第6号、P.67~110)
- (1989) 「社会言語学的アプローチから見る札幌市のアクセントの変遷～名詞篇(2)～」(『日本学報』第8号、P.1~32)
- 小野米一 (1991) 「札幌市方言多人数調査票について」(『東日本の音声～調査票編～』日本語音声における韻律の特徴：東日本における音声の収集と研究 (研究代表者 加藤正信) P.41~59)
- (1993) 「札幌市方言多人数調査資料について」(『東日本の音声 論文篇(3) 主要都市多人数調査 (札幌市・名古屋市) 報告』研究成果報告書 (研究代表者 加藤正信) P.51~86)
- Preston, D. R. (1991) Sorting out the variables in sociolinguistic theory. *American Speech*, 66:33-56.
- Rickford, J., & McNair-Knox, F. (1994) Addressee- and topic-influenced style shift: A quantitative sociolinguistic study. In D. Biber & E. Finegan (eds.), *Sociolinguistic Perspectives on Register*. Oxford: Oxford University Press. pp. 235-276.
- 真田信治 (1999) 「現代方言の様相」(『展望 現代の方言』白帝社)
- (2000) 『脱・標準語の時代』(小学館文庫)
- 真田信治・ダニエルロング (1992) 「方言とアイデンティティー」(『月刊言語』vol.20, No.10, P.72-79)
- Sankoff, D. (1985) *Statistics in linguistics*. In *Encyclopedia of Statistical Sciences*. New York: Wiley. pp. 74-81.
- (1986) Variable rules. In U. Ammon, N. Dittmar, and K. J. Mattheier (eds.), *Sociolinguistics: An International Handbook of Statistical Sciences*. New York: de Gruyter.
- Sankoff, David & Laberge, Suzanne. (1978) The linguistic market and the statistical explanation of variability. In D. Sankoff (ed.), *Linguistic Variation: Models and Methods*.

- New York: Academic Press.
- Sankoff, G., & Blondeau, H. (2007) Language Change across the lifespan: /r/ in Montreal French. *Language* 83 (3): 560-88.
- Shibamoto, Janet. (1985) *Japanese Women's Language*. New York: Academic Press.
- (1990) Sex-related variation in the ellipsis of wa and ga. In S. Ide & N. H. McGloin (eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kurosio. pp. 81-104.
- Takano, Shoji. (1998) A quantitative study of gender differentiation in the ellipsis of the Japanese postpositional particles -Wa and -Ga: Gender composition as a constraint on variability. *Language Variation and Change* (3): 289-323.
- (2000) The myth of a homogeneous speech community: A sociolinguistic study of the speech of Japanese women in diverse gender roles. *International Journal of the Sociology of Language* 146: 43-85.
- (2001) Marketplace membership as a variable outranking gender: Further evidence from 1999 Tokyo fieldwork. 『北星論集』38号、P.95~105
- 高野照司 (2011) 「札幌方言名詞アクセントの実時間研究—山鼻地区パネル調査 第一次報告—」(『北海道方言研究会会報』第88号)
- 徳川宗賢・真田信治 (編) (1991) 『新・方言学を学ぶ人のために』(世界思想社)
- Young, R., & Bayley, R. (1996) VARBRUL analysis for second language acquisition research. In R. Bayley & D. R. Preston (eds.), *Second Language Acquisition and Linguistic Variation*. Philadelphia: John Benjamins. pp. 253-306
- (たかの・しょうじ 北星学園大学教授)